

五味川純平の引揚げ体験——鞍山・大連での動向

高橋啓太

五味川純平の引揚げ体験——鞍山・大連での動向

高橋 啓太

はじめに

日本の植民地における文学者の活動や文学作品については、尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』（勁草書房、一九七一）を嚆矢として、川村湊の『異郷の昭和文学』（岩波新書、一九九〇）や『文学から見る「満洲」「五族協和」の夢と現実』（吉川弘文館、一九九八）、神谷忠孝・木村一信編『外地』日本語文学論』（世界思想社、二〇〇七）など数少ない数の研究がある。

近年では、朴裕河が外地からの引揚げ者の文学に関する問題提起を行っている。朴は、戦後日本において外地からの引揚げが国民的記憶として共有されず、内地中心の国家観が構築されていることを批判し、文壇においても引揚げ体験を持つ作家の文学は周縁に追いやられてきたと指摘し、「植民地・占領地体験とその後の引揚げの体験を素材とした表現の試

み」^{〔1〕}である「引揚げ文学」再検討の必要性を訴えた。

朴は「引揚げ文学」の担い手を、主に「明治以降、朝鮮や中国などへ渡っていった日本人の子どもとして生まれ育ったか、幼少期に親とともに渡っていった、青年期の前後までをそこで過ごし、敗戦後に戻ってきた人たち」^{〔2〕}としている。この定義に当てはまる作家として多くの名前が挙げられており、五味川純平もその中に入っている。五味川の父親は日露戦争後に大連に渡り、五味川は一九一六年に生まれた。そのまま大連で育ち、東京商科大学予科（現一橋大学）に入学するまで内地に行ったことがなかった。敗戦も満洲で迎え、一九四七年に引揚げている。

五味川の名を世に知らしめたベストセラー『人間の條件』（全十六部、三二新書、一九五六―一九五八）は、五味川自身の戦争体験を基にしているが、この物語の主人公・梶は引

げていない。ソ連軍の捕虜収容所から脱走後、妻・美千子の元に帰ろうとするが、力尽きて死んでしまうのである。朴が指摘する通り、この作品が「ある意味で引揚げできなかった軍人の物語でもある」ことは間違いないが、五味川は妻の元に帰還し、その後引揚げた。引揚げ前後の経験を基にした長編も書いている。しかし、五味川の引揚げ体験に注目した研究は皆無である。もし、五味川の文学を「引揚げ文学」として再評価するのであれば、その前提として引揚げ体験の詳細を明らかにしておくかなければなるまい。

本稿では、五味川の文学を「引揚げ文学」として再評価するための土台作りとして、敗戦後から引揚げるまでの動向を可能な限り明らかにすることを目的とする。

一、五味川純平の体験と小説

三一書房から、単行本の書き下ろし長編という形態で刊行された『人間の條件』は、完結編の第六部刊行後に発行された『週刊朝日』（一九五八・二・一六）の巻頭特集「かくれたベスト・セラー」で取り上げられたことによって、爆発的な売れ行きを記録した。この年には早くも映画化が決定し（小林正樹監督、松竹）、翌一九五九年から一九六一年にかけて

全六部が上映された。五味川は一躍時の人となったが、全く無名の新人でありながら、文壇関係者からの評価を受けることなく世に出てしまったこともあつてか、それ以降も文壇からは疎遠なままであった。⁽⁴⁾

すでに五味川の死（一九九五年）から四半世紀が過ぎたが、五味川作品の研究は進んでいない。『人間の條件』に関しては相当数の同時代評があり、近年でも、成田龍一・川村湊・五十嵐恵邦が再評価などを試みている。⁽⁵⁾しかし、『人間の條件』以外の作品に関する研究はほぼ見当たらない。五味川文学の研究史として振り返るだけの蓄積がないのが現状である。『人間の條件』以外に五味川の代表作として挙げられるのは、やはり映画化された『戦争と人間』（全一八巻、三一新書、一九六五～一九八三）であるが、『人間の條件』のブームがまだ続く中で、五味川は『自由との契約』（全六部、三一新書、一九五八～一九六〇）と『歴史の実験』（『中央公論』一九五九・一～四）という二つの長編小説を発表している。この二編はいずれも、敗戦後の満州にいる日本人たちの姿を描いており、引揚げるまでの五味川自身の経験を基にしている。

五十嵐恵邦は、「五味川はまとまった自伝を残していない。

フィクションとしてのみ自らの壮絶な体験を語ることができたと言った方がいかもしれない。自伝的要素はほぼすべて、フィクションと混然一体となって、彼の小説世界の中で展開される⁶⁾と指摘している。少なくとも、『人間の條件』『自由

との契約』『歴史の実験』は五味川の「自伝的要素」を多分に含んでいる作品であり、五十嵐の指摘は妥当だと言える。五十嵐はこれらの長編三作と『戦争と人間』に言及したうえで、「ドラマの舞台は、戦場から、生還を遂げた中国の都市、そして最後に日本へと移って行ったのである。それは、主人公（そして著者）の立ち位置が戦後日本に近づいてゆく足取りであり、個人的な体験が抽象的な歴史に変換されてゆく過程でもあった」⁷⁾（括弧内原文。以下同じ）というように、五味川が『人間の條件』とそれ以後の長編を通して、自らの戦争体験・引揚げ体験を「抽象的な歴史」に昇華していったと批判的に述べている。

五味川作品を読み直し、「個人的な体験」との向き合い方や思想性を問うことは、今後の五味川研究にとって重要な論点となることは間違いないが、五十嵐は五味川と物語の主人公を重ね、この問いに対する答えをあまりにも性急に出してしまっているように思われる。まずは、五味川が「小説世界」

に描いた「個人的な体験」を、敗戦による満州国の崩壊という歴史的コンテキストの中に位置付けてみる必要があるのではないだろうか。

二、『五味川純平著作集』月報の「追憶」

五味川に「まとまった自伝」がないのは確かであるが、『五味川純平著作集』全二〇巻（三一書房、一九八三・一九八五）の月報には、五味川が半生を振り返る「追憶」が連載されていた。最初に刊行された第一二巻（一九八三）の「月報1」に掲載された「追憶¹⁾」は、「幼かったころ、凍てついた暗黒の曠野を、父に連れられて夜汽車で走った記憶が鮮明に残っている」という書き出しで始まり、自分が「満洲二世」であることや父親の稼業と没落について書かれている。これ以降、「追憶」では進学への迷いや東京商科大学予科を一年で退学したこと、その後東京外国語大学に改めて入学するまでの生活など、それまで語られたことがない時期のことまで丁寧に振り返っている。

この『五味川純平著作集』は小説以外の著作を収録していないのだが、「追憶」は五味川の自伝として十分に読み応えがある。実際、「月報1」の最後には、「各巻の月報に著者の

「追憶」を連載します。はじめて語られる半生記として御愛読下さい」という編集部からの付記も記載されている。「追憶」を『著作集』のアピールポイントにしていたことがわかる。

「追憶(9)」「月報9」、「五味川著作集」第二〇巻、(一九八四)では、五味川が東京商科大学予科退学から三年後に改めて入学した東京外国語大学時代のことが語られる。

そのころから、私の生活にさまざまな変化が起きはじめた。／無味乾燥だった私の心象風景が、若い女性のしっとりした色彩に染まるようになった。数年後、私はその女性と結婚し、二人の子供が生まれ、平和な生活が続くはずであった。それがそういかなかったのは、結果的には私の裏切りによってである。弁解してみたことを書くつもりはないが、そうなるまでにお数年が経ち、戦争があり、敗戦があり、敗戦後の外地での混乱期があった、その時期を素通りは出来ないで、この追憶記がその年代を通るときに、出来るだけ虚心坦懷に書くことにする。

この引用が示唆しているように、五味川は大学時代に出会

った女性と「数年後」に結婚したが、後に離婚している。五味川が脚光を浴びた一九五八年の『週刊新潮』八月一八日号の記事「ベストセラーの隠れた条件——美千子は別にいる」には、この「若い女性」である「大田春子」(仮名と記されている)の独白が紹介されている。それによると、五味川と「大田春子」は一九四一年二月に日本で結婚式を挙げた後、満洲の鞍山市にある株式会社昭和製鋼所の社宅で生活していた。応召した五味川は敗戦後、一九四五年一月二日に「目をシヨボつかせ、げつそりやせて」帰ってきたが、翌年二月中旬に、一人で両親のいる大連に向かった。⁸⁾五味川は大連で後の妻となる「やす恵さん」(正しくは「安枝」⁹⁾)と出会ったようで、「大田春子」は安枝が一九四八年に引揚げ、すでに引揚げていた五味川に会いに来たことで、初めてその存在を知った。¹⁰⁾

この記事は、「八月十五日の怪談 戦争ドラマは生きている」という特集の中の一本であり、特集タイトルからわかるようにゴシップ的に書かれている。五味川は当時、この記事に対して特に反応を示していないが、先の「追憶(9)」からの引用部で「私の裏切り」と書いていることから、単なる噂話でないことは明らかである。そして、「その時期」のことを「虚心坦懷に書くこと」も宣言していたわけであるが、この後「追

「憶」の連載は、応召して妻（大田春子）に別れを告げるところまでで終わってしまふ。というのも、「追憶」は「月報10」（『著作集』第一巻、一九八四）・「月報11」（『著作集』第二巻、一九八四）・「月報12」（『著作集』第三巻、一九八四）では休載となり、最終的に計一七回の連載にとどまってしまったからである。⁽¹⁾ この途中三回の休載がなければ、「追憶」の中で「その時期」も回想されていたかもしれない、そうになっていたとすれば、『自由との契約』『歴史の実験』を読み直すための貴重な資料ともなっていたであろうが、今となつては無いものなだけではない。

しかし、『著作集』の月報には、敗戦前後に五味川と接点があった人物の文章も掲載されている。それらを読むと、「その時期」の五味川の動向を把握することができる。

三、鞍山への帰還

五味川は、軍隊での経験やソ連軍との戦闘後の彷徨については何度か語っている。⁽²⁾ 先に紹介した『週刊朝日』の特集「かくれたベスト・セラー」の中の略歴によると、五味川は応召して「満洲東北部の楊崗^{やんがう}の部隊に入隊」し、「さらに虎林、綏芬河^{すいへんか}北方などに転属、最後に穆稜^{むりやう}付近で陣地構築中、日ソ

開戦となり」（ルビ原文）、所属部隊は全滅する。その後、「敦化付近で武装解除を受け、九月末、収容所に入れられた。しかし、四十日後に計画的にここの作業場から逃走、十二月初めに新京（長春）へたどりついた」。⁽³⁾ 五味川の辿ったルートは、同記事内の地図にも示されている（図1）。

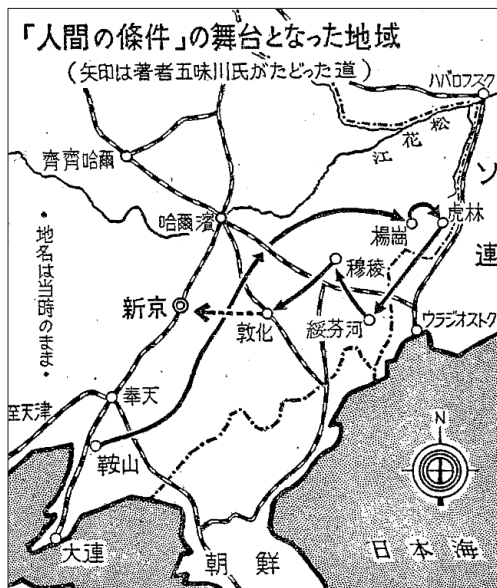


図1

記事の略歴ではさらに、新京から鞍山に戻ったことも書かれているが、五味川本人が鞍山帰還後のことを振り返った文章は見当たらない。図1からわかるように、鞍山は奉天（瀋

陽)の南、遼東半島の付け根に位置する都市で、一九一八年に南滿州鉄道株式会社(満鉄)が鞍山製鉄所を設立した。鞍山製鉄所は、満州国が成立した一九三三年には、事業拡大によって株式会社昭和製鋼所となった。⁽¹⁴⁾五味川は東京外国語大学卒業後、同社に就職し、妻子とともに暮らしていた。応召前には、鞍山から少し離れた鉱山の労務管理に従事しているが、その経験が『人間の条件』第一部・第二部に活かされている。

日本の敗戦により、満州の各都市はソ連軍に占領された。

鞍山への進駐は、八月二三日に空路でイワノフ少佐が到着したのが最初で、三一日にはカスロフ中尉が司令官として来鞍し、その後市内の製鉄工場施設の解体・撤去が始まった。ほどなく、八路军(中国共産党軍)が進駐し、日本人戦犯容疑者の逮捕または処刑を行った。

応召中に鞍山に転属し、敗戦を迎えた横井亀夫は『著作集』第五卷(一九八四)の「月報14」に「敗戦前後の鞍山」という回想を書いている。それによると、八路军は「人民を主体とする権力と体制の確立のために、日本人の中に協力者を求めてきた」という。この要請に応え、横井を含めた数人が「民主グループ」を結成し、『鞍山民衆新報』という新聞を発

行し始めた。五味川が姿を現わしたのは、一九四五年「十一月のある晩」のことで、「鞍山民主グループの陣容も活気づいた。横井ら「民主グループ」六名は、鞍山市市政府の外人課員として働くことになる」が、「一九四六年二月、国民党の第一師団が鞍山に進攻してくる情勢とな」った。横井は、「その直前の二月六日、五味川さんは大連の両親を見舞うために汽車で南下し、これが妻子とのわかれとなった」ったと語っている。この記述は、『週刊新潮』の「ベストセラーの隠れた条件」で「大田春子」が語っていたこととはほぼ一致する。

また、昭和製鋼所時代の同僚である有井尚武は、「月報17」(『著作集』第八卷、一九八四)の「純平さんとの四度の出会い」の中で、横井と同じく敗戦後の鞍山の様子と五味川の帰還について語っている。有井は、昭和製鋼所の「社員会の機関紙鉄魂」の編集部に入部し「ており、そこに五味川もいた。敗戦後、「鉄魂」の中心人物であった中村伊助⁽¹⁵⁾が「耳をふさがれた日本人に、内地の情報を伝えるために新聞を発行しよう」と、元「鉄魂」の編集部のメンバーを集め、市政府に積極的に協力を申し入れることとなり、「文化連盟」(八路军管轄の「市政府」の要望での中に「文化解放連盟」と名称を変更)という組織名で、週刊の「民主新聞」を発行した。有井たちは帰

還した五味川に「新聞の論説を引受けて貰った」という。有井によれば、一九四六年三月に国民党軍が鞍山に迫ると、「市政府」は「一斉に撤退を開始したが私達に何の連絡もな」く、

「文化解放連盟」の有井ら三人は「家族を残して中共軍を追尾し合流した」が、五味川は「私達と行を共にしなかった」。

先の横井の文章では、新聞を発行した組織の名称は「民主グループ」と漠然としていたが、有井は具体的な名称を書いている。「月報18」〔著作集〕第九卷、一九八四の吉田行雄「菓子作りの『五味川』」にも、「五味川が中心メンバーとなり

「文化解放連盟」が鞍山に誕生した」とある。「民主グループ」とは「文化解放連盟」のことであると断定できる。また、吉田はその後「中国人民解放軍」と共に農村や各地を歩いた」

が、「私たち一行六名の中には五味川の姿はなかった」と書いている。横井の文章を読む限りでは、「鞍山市市政府の外人課員」となった「民主グループ六名」が、国民党軍の進攻によって八路军と行動を共にしたのかはわからないが、横井陽一編『回想―横井亀夫の生涯 真実一路・労働者運動九十年の闘い』（同時代社、二〇〇二）の「略年譜」には、「民主グループは八路军とともに農村部に撤退（五味川純平氏とも別れる）⁽¹⁷⁾」という記載がある。八路军とともに鞍山から撤退

したのは六名だったようだが、そのうちの三名は横井・有井・吉田であったということになる。

鞍山では、多くの日本人技術者が留用（中国にいる日本人を帰国させずに徴用すること）されたが、⁽¹⁸⁾「鞍山市市政府の外人課員」となった「文化解放連盟」のメンバー六名も、技術者たちとは状況は異なるとはいえ、やはり留用されたということになる。五味川や横井・有井・吉田らは、国共内戦の影響で鞍山を離れることになるが、その事実とは、満洲国崩壊後の中国東北部に残った日本人が、国共内戦下でどのように活動していたのかを物語っている。

四、大連での動向と引揚げ

遼東半島の南端に位置する大連は（前節の図1参照）、日露戦争後の一九〇五年、ポーツマス条約により、旅順とともに日本の租借地関東州となった。のちの満洲国には含まれない。「はじめに」の中で、五味川の父親が日露戦争後に大連に渡航したと書いたが、五味川の述べているところでは、陸軍用達の商人として一時は事業をかなり拡大したそうであるが、シベリア出兵を境に没落したようで、五味川がごく幼い頃を除いて、家庭は貧しかったという。⁽¹⁹⁾

敗戦後、満州国の各都市同様、大連にもソ連軍が進駐した。一九四五年一月八日、ソ連軍の統治下で中共軍による大連市政府が樹立され、翌年一月二〇日には、新市政府の意向に沿う形で、日本人労働組合が発足した。⁽²¹⁾五味川が鞍山からやってきたのは、その翌月ということになる。五味川が鞍山での活動を振り返る文章は皆無だが、大連にいた当時のことについては、「燃えていた日々——亡き妻への鎮魂歌——」(『オール読物』一九八三・一)の中で振り返っている。五味川は、次のように書いている。

日本の敗戦から間もなく、中国本土から旧満洲へかけて、中国軍の内戦がはじまっていた。蒋介石の中央軍と、共産党紅軍(満洲では林彪率いる東北民主連軍)との内戦である。東北民主連軍の中に朝鮮人部隊の独立第四師というのがある、その経済工作部隊の一部が大連に出て来ていた。／簡単に書けば、私はそこに入って、朝鮮人民民主連合会と日本人勤労者組合との接点となって、共に窮迫している二つの団体が協同できる点は協同して些かでも利益をもたらしと、甘い考えで、だが真剣になっていた。⁽²²⁾

国共内戦期の中国東北部における朝鮮人の状況について論じた李海燕の論考を参照すると、「朝鮮人部隊の独立第四師」とは朝鮮義勇軍第一支隊のことである。朝鮮義勇軍自体が、中国共産党の下で結成された朝鮮人の部隊であった。第一支隊は一九四六年二月の東北民主連軍編入時に「李紅光支隊」と改称され、さらに、「一九四六年十二月に東北民主連軍独立第四師に改称され」ている。⁽²³⁾大連に一人で来た五味川が、どのようにして「独立第四師」に入ることになったのかは不明である。

五味川は、この「朝鮮人部隊の独立第四師」で実際に携わった仕事の中身についても振り返っている。「大連在住の日本人から不用のネクタイを組合の組織力で集めてもらって、朝鮮人の商人二人が南朝鮮に運び、利益を持って帰って、その商人と、朝鮮人民民主連合会と、日本人勤労者組合とで分配する計画を立て、その後、計画通り「日本人組合の組織力で、何千本だったか、一万本近いネクタイが集った」が、ネクタイを送っても朝鮮側が代金を支払おうとしなかった。⁽²⁴⁾五味川は話し合いの場で相手を直接批判し、しばらくしてから「連合会のあり金全部と、トラック一台に山盛りの塩鯖を、日本人組合に運び込むことで円満な終りを告げた」⁽²⁵⁾という。

このエピソードに登場する、「不用のネクタイ」を集めた「大連在住の日本人」は、『著作集』の「月報12」（『著作集』第三巻、一九八四）に「栗田茂君のこと」という文章を寄せている高橋庄五郎である。「栗田茂」は五味川の本名である。

高橋は、五味川が東京外国語大学在学時に知り合っているが、その後接点はなく、敗戦時は沖電気の大連工場で働いていた。⁽²⁶⁾一九四六年一月に前述の日本人労働組合発足後、四月一日には「労組の傘下団体として、主に「引揚げ」までの食糧確保を目的に、約四万世帯（十七万人弱）を組織した「大連日本人勤労者消費組合」が結成され」、高橋も発足に関わった。⁽²⁷⁾高橋が五味川と再会したのは、消費組合の活動に従事している時で、五味川は「商売を持ち込んできた」。

私が一番困ったのは朝鮮の塩鯖とネクタイの交換だった。ネクタイ一本に塩鯖一本の交換と言うことで日本人のネクタイを渡したのだが、待てど暮らせど塩鯖は入ってこない。ネクタイを五本、十本と出した人たちからヤイノ、ヤイノの催促である。私は腹を立てて朝鮮人商人と会った。結局はトラック一杯の塩鯖を受取っただけで、あとはネクタイ一本を三十円か五十円にして朝鮮人商人

が現金で支払った。日本人のほしかったのは塩鯖であつたから、栗田君のアイディアは実現しなかったわけである。⁽²⁸⁾

先の引用の中で、五味川は「日本人勤労者組合」「日本人組合」に取引を持ちかけたと書いていた。日本人労働者組合とも日本人勤労者消費組合とも取れる書き方であるが、高橋が実際に取引に対応していることから、この「組合」が後者であることは間違いない。

五味川は、この取引が「円満な終りを告げた」と振り返っていたが、日本人の食糧確保のためにネクタイを回収・提供した高橋にとっては満足する結果とはならなかった。五味川にとって重要だったのは、自分が仲介した取引を成功させることそれ自体であった。それは、「直接的あるいは間接的勝利者たちの中で背骨を伸しているためには、自分が関係している異国の団体なり、組織なりから、一文も報酬を貰わずに、その中で有効な働きをすることが、一番簡単な方法であつた」⁽²⁹⁾と語っていることから推察できる。取引の仲介は、敗戦国民として卑屈にならずに生きるための方法だったのである。

「燃えていた日々」の冒頭近くで、五味川は「私は昭和二十二年晩秋に、小さな漁船で非合法に帰国した⁽³⁴⁾」と書いている。先述の消費組合との取引の後、五味川のもとに「日本内地と大連との間に密航ルートを拓け、という話が舞い込み」、危険を承知で「私が船で荷を運んで、内地に拠点を作り、また船に荷を積んで帰って来る」ことを試みるのである⁽³⁵⁾。すでに中国を始めとして外地からの引揚げは行われていたが、自らも上海から引揚げてきた川島福太郎は、「日本へ引揚げ後、再び大連附近へ日本の雑貨を密輸して儲け、帰りの荷物に軍の貯蔵した皮革類を入れて日本へ密輸したものもあるにはあつた」という、五味川の密航と類似する例を挙げている⁽³⁶⁾。

五味川が他の船員一〇名と乗った船は、「五島列島の南端部に近い湾内に辿りついて、エンジンが動かなくなつてしま⁽³⁷⁾い、警察に捕まった。こうして、大連に戻るつもりでいた五味川は、不本意な形で引揚げることになった。前節で、鞍山の「文化解放連盟」に加わっていた有井尚武の文章を確認したが、有井は戦後の「博多の街」で五味川と再会している。五味川は有井を呼び止め、「大連から焼玉エンジンの小船で物資を積んで密航してきた」が、「税関と米軍につかまり、

物資を押収された」と話したそうである⁽³⁸⁾。五味川も「燃えていた日々」の中で、「積んできた荷物は佐世保の税関に没取され」、それを買戻すために「博多の繊維業者を口説きまわつて、ようやく必要額を満した」と語っている⁽³⁹⁾。五味川が、博多で物資の買戻しのために奔走していたことがうかがえる。

おわりに

五味川純平といえど、これまで注目が集まってきたのは『人間の條件』とそこに描かれた戦争体験であり、敗戦後の鞍山・大連での動向は等閑視されてきた。本稿では、五味川とその関係者の回想を取り上げることが中心となつてしまつたが、五味川の引揚げまでの経緯を整理することができた。本稿での作業を基礎として、今後、五味川文学の再評価を試みるつもりである。

自らの戦争体験を基に『人間の條件』を書いた五味川は、その後すぐに鞍山・大連で過ごした敗戦後の二年間と向き合っている。『自由との契約』『歴史の実験』を書いた。『自由との契約』には大連での密航と引揚げが描かれており、『歴史の実験』には鞍山の「文化解放連盟」での活動と国民党軍侵攻による

退避が描かれている。戦後文学において、日本人の留用を描いた作品としては、上海で敗戦を迎え、国民党の組織で働いた経験を描いた堀田善衛「菌車」(『文学51』一九五一・五)⁽³⁶⁾などがあるが、『自由との契約』『歴史の実験』は、中国東北部での留用を描いた稀少な文学作品としても読み直されるべきである。

また、五味川が密航に失敗して捕まった後の回想からは、戦後日本のポストコロニアルな問題系との接点が浮かび上がってくる。当時、引揚げ船が出入港する各都市に引揚げ援護局が開設され、引揚げ者は収容施設に入っていた。五味川も収容施設に入っていたようで、「大村収容所は、窓硝子がなく、有刺鉄線を張ってあるだけで、近隣諸国(台湾、朝鮮)の人々を主に収容していた」⁽³⁷⁾と振り返っている。しかし、大村収容所は佐世保引揚げ援護局の収容施設を改良して一九五〇年に開設された収容所なので、五味川の記述は誤りである。佐世保引揚げ援護局の局史には、一九四七年六月から収容施設の「十二号宿舍」は「密航朝鮮人収容所となる」⁽³⁸⁾と記載があることから、五味川はこの宿舍に収容されていた可能性が高い。

大村収容所は日本に密航し強制送還される朝鮮人の収容所として誕生したが、一九四七年に佐世保引揚げ援護局の「十二

号宿舍」が「密航朝鮮人収容所」とされたことから⁽³⁹⁾も、密航者が正規の引揚げ者と明確に区別されていたことがわかる。このことは、密航取り締まりの厳格さを意味するだけではない。福本拓は、一九四七年五月に公布された外国人登録令が「密航」取締の延長線上で、在日朝鮮人を確実に管理できる者とそれ以外とに二分」する機能を持っており、そこに「植民地主義の継続性、すなわち包摂しつつ差異を創出する(さらにそのことによって従属を強いる)」という特性の残存を看取できよう」と述べている。⁽⁴⁰⁾五味川は密航したことにより、期せずしてこうした問題系の中に位置付けられる施設に入っていたのである。

注

(1) 「おきざりにされた植民地・帝国後体験」(朴裕河『引揚げ文学論序説―新たなポストコロニアルへ』人文書院、二〇一六、所収) 二八頁。

(2) 朴、注(1) 前掲論、二八頁。

(3) 朴裕河「引揚げ文学」を考える」(『日本近代文学』第八七号、二〇一二・一一)、注(1) 前掲書、一五頁。

(4) この問題については、拙稿「五味川純平『人間の条件』に関する序論的考察」(『花園大学文学部研究紀要』第五二号、二〇二〇・三)で論じている。

(5) 成田龍一『戦争経験』の戦後史——語られた体験／証言／記憶(岩波書店、二〇一〇)、川村湊『人間の条件』(1956-1958) 五味川純平(1916-1995) 語り継がれた植民地と戦争の「記憶」(『現代思想』第三三巻第七号、二〇〇五・六)、五十嵐恵邦「五味川純平と『人間の条件』」(『敗戦と戦後のあいだで 遅れて帰るし者たち』(筑摩選書、二〇一二)。また、本誌前号(第五三号)掲載の拙稿「五味川純平の中国観と『人間の条件』——第一部・第二部を中心に」でも再評価を試みている。

(6) 五十嵐、注(5) 前掲書、五一頁。

(7) 五十嵐、注(5) 前掲書、八一頁。

(8) 「ベストセラーの隠れた条件——美千子は別にいる」(『週刊新潮』一九五八・八・一八) 三五頁。

(9) 五味川や五味川の知人の文章では「安枝」となっており、一九八二年五月一日の各新聞の計報(五月一〇日死去)でも「安枝」となっている。しかし、五味川が『人

間の条件』執筆中の家計を支えた安枝への感謝を述べた「夫の条件」失格(『婦人公論』一九五八・四)に掲載された安枝の写真の下には、なぜか「やす恵夫人」と書かれている。「ベストセラーの隠れた条件——美千子は別にいる」はこの記事に言及していることから、「やす恵」という表記を用いたと思われる。

(10) 澤地久枝「師 五味川純平」(『別冊文芸春秋』一九九五・七)によると、五味川の最初の妻の名前は一枝で、安枝夫人を亡くした五味川は亡くなるまでの十年間、一枝とその間に産まれた長女郁子らと一緒に暮らしていたという(初出誌、三九二頁)。

(11) 「月報9」の最後には、編集部からの連絡として「五味川先生の御都合により、次回と次々回の月報では「追憶」を休載いたします」という記載がある。

(12) 「復員できぬ戦争」(『朝日新聞』一九六七・八・二七、朝刊、一八頁)、「壊滅の日——ある敗走——」(『週刊読売』一九六七・一一・二四)、「関東軍 栄光の虚像と悲惨の実像」(『文芸春秋』一九七一・四)など。

(13) 「かくれたベスト・セラー」(『週刊朝日』一九五八・二・一六) 八頁。

(14) 満洲製鉄鉄友会編『鉄都鞍山の回顧』(満洲製鉄鉄友会、一九五七) 参照。

(15) 鞍山に進駐したソ連軍・八路軍の政策やそれによる被害の状況については、満蒙同胞援護会編『満蒙終戦史』(河出書房新社、一九六二) 一七二～一七三頁、及び二三七～二三九頁、参照。

(16) 中村伊助は漫画家で、引揚げ後は「漫画集団」同人として活動した。五味川とは親しかったようで、本稿でも引用した吉田行雄「菓子作りの『五味川』」(『月報18』、『五味川純平著作集』第八巻、三一書房、一九八四) には、「中村と五味川は東京の墓地に隣り合わせに墓を建てるほどの仲であった」とある。

(17) 横井陽一編『回想―横井亀夫の生涯 真実一路・労働者運動九十年の闘い』(同時代社、二〇〇二) 四七九頁。

(18) 鞍山における日本人技術者の留用に関しては、満蒙同胞援護会、注(15) 前掲書(七〇六～七一二頁)、松本俊郎「鞍山日本人鉄鋼技術者たちの留用問題―中国東北鉄鋼業の戦後復興―」(『人文学報』第七九巻、一九九七・三) などを参照。

(19) 柳沢遊は、日露戦争前後に大連に渡航した日本人の間

では、軍用達商が一大勢力となっていたと指摘している(『日本人の植民地経験 大連日本人商工業者の歴史』青木書店、一九九九) 四七～五二頁。

(20) 五味川純平「追憶(1)」(『月報1』、『五味川純平著作集』第二巻、三一書房、一九八三) 参照。

(21) 満蒙同胞援護会、注(15) 前掲書、三五七～三五九頁、石堂清倫『我が異端の昭和史 上』(平凡社ライブラリー、二〇〇二) 三六一～三六八頁。

(22) 五味川純平「燃えていた日々―亡き妻への鎮魂歌―」(『オール読物』一九八三・一) 五二頁。

(23) 李海燕『戦後の「満州」と朝鮮人社会―越境・周縁・アイデンティティ―』(御茶の水書房、二〇〇九) 五一頁。

(24) 五味川、注(22) 前掲論、五四頁。

(25) 五味川、注(22) 前掲論、五五頁。

(26) 高橋庄五郎「栗田茂君のこと」(『月報12』、『五味川純平著作集』第三巻、三一書房、一九八四)

(27) 森戸睦子『大連の引揚げ』を見届けた男 高橋庄五郎の日中友好50余年(創土社、二〇〇〇) 四六頁。

(28) 高橋、注(26) 前掲論。

(29) 五味川、注(22) 前掲論、五二頁。

(30) 五味川、注(22) 前掲論、五一頁。この後に密航当日を回想し、「十月、海は荒れていた」(五六頁)と書いている。

(31) 五味川、注(22) 前掲論、五五～五六頁。

(32) 川島福太郎『地獄の海 密輸密航奇譚』(ジープ社、一九五〇)二〇三頁。

(33) 五味川、注(22) 前掲論、五七頁。

(34) 有井尚武「純平さんとの四度の出会い」(『月報17』、『五味川純平著作集』第八卷、三一書房、一九八四)

(35) 五味川、注(22) 前掲論、五七～五八頁。

(36) 陳童君は「[留用]日本人の(まなざし)」——堀田善衛『菌車』の生成とその問題意識——(『国語と国文学』第九〇巻第六号、二〇一三・六、『堀田善衛の戦後文学論——「中国」表象と戦後日本——』鼎書房、二〇一七所収)で「菌車」を取り上げ、日本人留用者の表象分析を行っている。

(37) 五味川、注(22) 前掲論、五七頁。

(38) 『佐世保引揚援護局 局史(上巻)』(佐世保引揚援護局、一九四九)九二頁。

(39) 玄武岩は、大村収容所が「集団的な送還口になる実在

の場所だけではなく、「朝鮮人の「在日」と「密航」を問わず、「場違い」な朝鮮人を帰還させるために国民国家の境界上に設けられた強制退去のシンボルとしての非在の場所でもあった」と指摘している(『密航・大村収容所・済州島 大阪と済州島をむすぶ「密航」のネットワーク』『現代思想』二〇〇七・六、一六七頁)。本論で直後に触れた福本拓も、玄論を参照している。

(40) 福本拓「密航」に見る在日朝鮮人のポスト植民地性」(『アジア遊学』二〇一一・九)五七頁。

付記

引用に際しては、一部を除いてルビは省略した。本稿は、二〇二一年度稲盛研究助成による成果の一部である。